
私と竜人

多島途

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と竜人

【著者名】

多島途

N5308Q

【あらすじ】

生まれもつた黒髪と赤い眼。氣味が悪いと親に捨てられ、悪魔だと、忌み子だといわれ町の離れにある小屋に押し込まれた少女。離れに住む少女に幸せがあるのか？＊＊＊＊少女と少年が成長しつつ暮らしていくお話です

「赤い赤い瞳の少女、黒い黒い髪の少女

君はそんなに嫌われちゃって、楽しいかい？嬉しいかい？

それとも悲しいかい？哀しいかい？」

歌つよつて青年は言つ

無表情で少女は答える

「たのしくないうれしくない

かなしくないかなしくない

そんな「じげをわたしませしらない

あなたはだれ

わたしのしをじゅめあるひと？」

少女の言葉に青年はクスクスと笑つ

「そうだね…別に君の死を邪魔するつもりはないよ
ただ遅らせようとしてるだけ

君には頼み「じがあるんだよ」

「じひないしらない、あなたはしらないひと
だからききたくない」

少女は拒絕する

「まあまあ、そつ言わずに
君と同じで黒い髪に赤い瞳、しかも最も嫌われる黒い竜人だよ

この子と一緒に住んでほしい

期間は十年」

「りゅう、じん…？」

いつの間にか青年の足には少女と同じくらいの少年がしがみ付いていた

少年の少女と同じ黒い髪と赤い瞳以外特徴となるところを挙げるとすれば

包帯で左目・首・両腕・両足を巻いている点と右頬の部分が若干鱗で覆われているところだろうか

「知らない？幼少期は人の姿をとつて人と共に生活する奇抜な種族さ
僕が君たちを助けられたらしいんだけど
僕はそこまでこの子に手を貸しちゃいけないんだ」

「なんでわたし、わたし…わ、わたしにちかづかないで
くろをもつひとはきらわれるあかのめをもつひとはきらわれる
りょうをもつているひとはもつときらわれる
わたしといふとやくがうつてしまつ
ちかづかないで」

少女の言葉に青年は笑顔になる
「優しいね、君は

「ここは十分な食物もないだらうしね

だから、君たちはここ、晴の国から隣の隣、森の国に行つてもひらつ
よー

準備だつてばつちつだ！」

そういうて、青年がコートの中からだした小さな袋からあつえない
くらに沢山の道具を取り出した

「衣類一式と移動の為の杖とか、

このフード晴の国にいるまではフードを深くかぶつていてね！

後はお金が入つてゐから、まあ頑張つてね！」

1話目 - 1（前書き）

これが終わったら次は3人？の紹介があります

有無を言わさず押し付け、去つていた。竜人の少年を置いて少女が目をグルグル回しながら状況を必死で確認しようとしていたら少年のほうが声をかけてきた

「なまえ、君の名前」

少年は少女の名前を聞きたいらしい

「…………きみは？」

「……ないよ、君もないの？」

「うん」

少年はもう一つ質問をした

「そう

ねえ、君は怖くないの？

俺はまだ幼い竜だけど、竜人だ」

「まちの、ひ……とのほうがわ、わたしはこわい
あ、なたはわからないけど……いま、わたしをしいたげない、いやな
めでわたしをみない」

町の人たちにされた行為を思い出しているのか酷く怯えながら不安を取り払おうとしながら少女は必死に言葉を紡ぐ

「そんなこと、しない」

少年はそんな少女を安心させるように優しく陽だまりに咲く向日葵のよきな暖かい笑顔を少女に向けた

少女は少年の笑顔のおかげで落ち着いたようでそれに応えるよう

さおりのないが嬉しそうな笑みを浮かべた

「さつきのひともくろいかみ…だった
めはくろかつたけど…あのひとはなに?」

「さつきのひと」とは少年を連れてきた青年の「じよだ

「あの人は、魔を統べる王だ

魔の上に立ち

魔を愛し

魔の為に動く

魔であることに誇りを持たせてくれる素晴らしいお方

…りしこ

少年は実際に青年の凄さを垣間見たわけではないので、風の噂で聞いたことをそのまま少女に伝えた
やはり、というべきか少女は理解できていなかった
勿論、少年も意味などは分からなかつた

1話目・1（後書き）

次の次からは旅に出ると想います！
閲覧ありがとうございました～

これまでの人（3人）

少女 齢10
人間

黒い髪と赤い眼を持つ

少年より暗い赤

身長は130々？程度

姿勢はいいが痩せこけていて分かりにくく

髪は伸ばしつばなしで床に触れてしまつほど長い

鳥みたいな艶のある黒

少年 齢10（年を取るにつれ成長が遅くなつていいく）
竜人

少女と同じく黒い髪と赤い眼を持つ

髪は少し紫がかつていて

目は明るい色

身長は少女と同じで130？程度

包帯のを体中に巻きつけている

所々黒い鱗で覆われている

髪は肩に触れる長さ

竜に成ると子供一人乗れる程度の大きさ（150？）

青年（ジアニス＝フォーテイス＝ジュネウス＝サタン）

齢1500を過ぎたくらい

魔人

黒い髪に黒い眼を持つ

両方とも漆黒

身長は190？越え

少女に少年と住むように無理やり計りつた、少年がいつには魔王らしい変な魔族

青年と少年が来た頃はもう日が暮れてきているところだったので
国を出るのは次の日元じょうと少年は提案した

少女は頷いた

少女の住む家に入ると

そこは粗末なものでテーブルやイスなどといった家具はない
ベットなんでも勿論ある筈もなく、家にあるものと言つたら藁
の塊位である
藁をベットとして使つていたのだといつことがわかる

少年は、何も話さず只々絶句していた

少女にではない

国の言い伝えか宗教か何だか知らないが少女をここまで追いやつた
この国の、この町の人たちの酷さに

少女が藁の上で寝た後少年は密かに決意した、少女を守り通そつと
傷つけないと……

早朝一

少女と少年は町の人たちが起きるよりも遙かに早く起き旅立つ準備
をした

「この、袋、」

少年が指差したのは昨日青年が渡してきた不思議な袋である

「…？」

少年の意図がわからぬつで、小首をかしげる

「！」に守護の魔法陣が描かれている

後この袋に入ってるこの2本の杖、これには守護と反射の魔法陣が刻まれているんだ

守護と反射の魔法陣は俺らを守ってくれるんだ

「へー…」

分かつたよつた分からぬつ微妙な表情をしてい

「まあ、とりあえず分からなくとも持つといってくれればいい

俺らの田標は一先ず国を出ることだ

といつても俺にかかれば直ぐなんだけど

とこつわけで袋から防寒具一式出してくれるか？

防寒具とこつ言葉を思い浮かべながら出せば出でべるといつ

先ほどからよく分からぬつ事ばかり言つてはいる少年に混乱しながらも指示され通りに袋から防寒具といつ言葉を思い浮かべながら指先にあたつた何かを引っ張り出してみた

「そつ、このもこもこしたのが防寒具つてこつんだよ

「ぼーかんぐ。もこもこ…もこもこ」

少女はもこもことした手触りが気に入ったのか指先でもこもこ感を楽しんでいる

「そ、腕を通して、帽子もかぶつて」

ともじもじを楽しんでる少女の邪魔をしなこよつぱりぱりと着替えさせた

「あ……なたは……きないの？」

「俺は必要ない

竜人は人よりも皮膚が何倍も硬いし丈夫だから

「そ……なんだ、す」「……い……ね、りゅうじゅん」

「うーん、まあ人よりは丈夫に出来るね
大人になつたらもつと力も強くなるんだうけど、俺はまだ子供だから

そ、準備もできたしそろそろ隣の国に行こうか！」

少年は子供だから、と言つた時に少しだけ哀しそうに頭を伏せた
少女はあえて気づかないふりをし、返事をした

「うん、行く」

最後に、家…と呼べるかわからない場所を一瞥し、

少女は竜の姿をした少年の背に乗つた

「落ちてしまふから、しつかり掴まっていて」

「うん…」

少女に氣を遣いゆつくりと上昇する少年…もとい幼童

「わ、す」「い……！」

段々と地から離れていくことに驚き、思わず生まれて初めて、感嘆の声を上げる少女

ある程度の高さで空中に留まり少女に声をかける

「じゃ、行くよ」

「うん…」

それからほつとした様子で空の上から眺める景色に魅入つて

いる

「落ちないよ、こしつかり掘まつててね」

「だいじょー……ぶ、だと……おもう」

自分でも自信がないらしく最後の方は消え入るような声になっていた

「あ、そうだ隣の国に言つたらまず名前を付けようか、俺たち」

「……なまえ?」

「そ、名前!」

君とかねえ、じゃ他人行儀っぽいでしょ?

これから一緒に生活していくんだし

君が俺の名前を決めて、俺が君の名前を決める。どう?「

竜の姿のため表情は分からぬが声は楽しそうである

「……なまえ、

「うん……なまえ、……がんばる!」

少年の楽しそうな声につられて少女も楽しそうに声を上げる

ポツポツと会話をしていると日の光が日に射し込んだ

「日が昇ってきた

今は晴の国隣、土の国だね
土の国のはずれの林、見える?」

少年が首だ林の方に動かす

「見えるよ」

「そこで朝ごはんにしようか

晴の国は抜けたし、急ぐ理由もない

といつか俺がお腹減った……

「クククと少女もつなずく
どうやら少女もお腹がすき始めていたようだ

土の国のはずれにある林

羽音をたてて地上に降りたつ

「もう、降りて大丈夫だよ」

おずおずと少年の背中から降りる

少年の背中から降りた少女は拳動不審げにキヨロキヨロと林を観察する

林には小さな花などが咲いている

それに気づいた少女はふらふらと花の方に近寄る

一方少年は、ここに危険な気配がないと判断して人に成ると
あの不思議な袋から材料と調理道具に食器、簡易テーブルを取り出す
ここで少年は思った

「（あの魔王…様、どんだけ物を入れたんだろ…）
試しにと思って念じたら材料はともかく包丁やまな板、食器に簡易
テーブルまで出でたし

…まあいいや、とりあえず簡単なものでも作ろう（）」

考えるのがめんどくなつた少年は調理を始めた

小さな花を見ていた少女は、少し先に光つていて何かを見つけ歩み
を進める

その光は宙を自由に飛び回つていて

少女が近づくと光はキラキラと近くに寄つてきた

› あーりー？ あーり、 あーり、 あーり、 綺麗な色ねえ く

光は、 ふよふよと少女の周りをぐるっと回り顔の前で止まつた

「…………なに？」

› ふふ、 『めんなさいね 髪や瞳の色があまりにも綺麗で、 つい
あー私は、 精靈のミーリアよー

ねえー、 貴女は何ていうのかしらあー？ く

「あ、 え… ようせい？

えと、 名前はまだ無くて森の国に言つたらあの子に決めてもらひ…
わたしもあの子の名前を決めるの」

と言つて少年のいる方に視線を向ける

精靈も少年の方に興味深そうに視線を向けた

› セうなのー

んー、 私もあつちに行つてもいいかしらあ？ く

「…うん」

初めて見る精靈に驚きながらも少年の方に戻つていく

少年は光る何かを連れている少女を見て慌てて包丁を置いて少女の方に向かう

「精靈… ？ どうして君に着いてくるの？ ？」

「こーに来ていいつて聞かれたから、 うんつて言つた」

「そ、 そなんだ、 でそのここに来たいつて言つた妖精はなぜこ
に来たいと？」

› いいじゃなーい、 面白そうだったから来たのよん

そういうえば貴方の髪と瞳も綺麗ねえー

私、 綺麗なものって好きなのよねえー く

光が嬉々として発光している

精霊は顔や体がある訳でもなく、発光して喋っているのだ

少女は興味津々といった感じで、少年は変な精霊だなーと半分呆れた様子で見つめている

そんな二人の視線を気にした風もなく

>貴方たち森の国に行くんでしょお？

そうだ、貴方たちに私の本体を預けとこうかしらー。<

と名案だと言わんばかりにキラキラと発光する

「は？ 本体って結晶の事でしょ……？」

傷ついたりしたらどうするの？」

第一、精霊のくせに……まあこの子はともかく、俺の事そんなに簡単に信用して」

この子は……の所で少年は少女を見遣る
といつか、精霊のくせに、といふことは少年はどうやら精霊について、知つてゐるようだ

困った、と表すようにうねうねと少年の周りを回る精霊
「んーまあ、他の子はそつかもしれないんだけどねえ～く

「私、目を見ただけで人の根底が見えるのよ～？」

……そーねえ、貴方たちを信用したんじゃなくって私の目を信用した
つてことこじましょ！

「……」

はーい、坊や手を出して頂戴なく

「（……どうじょうか、この子が随分と気に入っているみたいだしな
ーま、いいかな……うん）
んー、じゃあ……はい」

少年は少女を見てちょっとだけ考え、最後は面倒くさがり妖精の方
に片手を差し出した

妖精は少年の掌に露の形をした透明な結晶を落とした

>坊や、私の本体を握つて魔力を流してくれるかしらあ
貴方ー、そのくらいもうできるわよね？<

精靈は、そのくらいお見通しよんつと言つてチカチカと光を出す
少年は精靈に対しちょつといラツとしつつも言われた通り、結晶に
魔力を流す

魔力が結晶に流れ、精靈（光）が一層チカチカと光はじめ、ついに
は視界埋め尽くすほどの光で少年と少女は目を閉じた

「もう開けても大丈夫よー」

と精靈が声を出しが、少年と少女はその声に違和感を覚える
恐る恐る目を開けると知らない妙齡の女の人が鎮座していた

「……だれ？」

「さあ？」

「やーねえ、私よ私！

ミーリアよお、お嬢さん

坊やの魔力のおかげで実体化出来たのよお

うふふふー あ、でもどの精靈でもできる訳ではないのよー！

ごく少數の力の強い精靈だけー、人間の言葉でいうと聖靈スピリットの方かし
ら？？

私たちはあまり区別しないのだけど、力の強さでそつなつちゃうの
よねー」

----- 5 (後書き)

次話から精靈表記をミーリアにします。

「す、すっぴりと…？」

少女はは覚束ない喋りでミーリアの言つた言葉を首を傾げながら繰り返す

どうやら意味がよく分からぬようだ

「んー…普通の精霊より力が強いつて覚えとくといいよ、
(森の国に行つたら一般教養も教えておこう…)
別に精霊とかについては教えなくてもいいだろうけど
あんなとこで暮らしてたならお金や物の価値もわからないだろうし
…」

少女に助言した後、少年は調理に戻りつつこれからのことについて思案していた

「お嬢さんは、私と一緒に遊びましょー！」

「あ…でも、あの…、」

少女は遊びたいようだが、少年の方をちらちら見ている
少年が料理をしているの自分は遊んでいいのか考えているようだ
その様子に気づいた一人は、同時に言つた

「じゃあ私が手伝つわよー、だからお嬢さんは遊んでいいのよ」

「二人は遊んでいいから、だから君は心配しなくていいよ」

二人とも少女は遊んでいい、という意見は同じだが
ミーリアは、少年を手伝つと言い 少年は、ミーリアも遊んでいいと言つ

そんな一人の言葉を聞いて、少女は「わたしも…りょーりするの、てつだう」

少女の言葉に驚きつつも少女に甘い少年は「いじよ」と即座に言いそうになってしまったが

包丁やピコーラーで怪我でもしたら大変だとギリギリ踏み止まつた「森の国に着いたら、料理の仕方やいろいろなこと教えてあげるから、今はミーリア遊んでてくれる？」

それにもう作り終えるから、ね？」

ミーリアも少女が怪我してしまつと思つたらしく少女を抱えてそのままぐるりと回しておんぶをした

「やつぱり、私と一緒に遊びましょーね！」

坊やが言つてくれたように森の国に行つたら、教わりましょー？」

少女は一人の笑顔に若干氣を圧されながら素直に返事をした

「あ……うん、わかつた」

少女はミーリアと遊びながら少年に何かできる」とはないと考えミーリアにお願いをしてみた

「ミーリア、あの…あのね、ミーリアになまえのつけかた、おしえてほしい…の」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5308q/>

私と竜人

2011年10月7日09時06分発行